

はつていては、古跡調査が、家屋の骨董  
いじりと同様に止つておはるまい。今  
日、現実の社会、倒産の公案による美しい自然の汚損  
とか、経済生長による文化財の破壊とか、そんな  
動きの中で、本場の郷土の姿をつかみ、これを正しく解  
釈して、機会と失せず、地域社会に打出して、適切を呼ぶ  
かけや奉仕がいつても出来る態勢でありたい。

過去十三年お札の歩んだ道は、今ある程度は積又  
上げをしてゐる。これから先は更に十年、二十年とこの  
業績と更に高めていきたい。それには、会員一人一人の進  
歩向上があり、單なる物識り、趣味から抜け出して、一  
歩一歩教養を身につけて行くことを心かけたい。幸いお  
札は佐伯史談会という組織の力がある。全会員がこ  
ゝ組織用務によつて一人一人の教養を高め、生き生きと  
し、郷土愛の発言をおこない、場合によつては世論に訴  
え、宣傳啓蒙に立ち上り、郷土文化の向上発展に一層の  
寄与を心かけたいものである。

研究

秀乘律師と長曾我部氏

本会会員 佐 脇 貴 一

前号に河野共一氏が紹介されていた、大日寺住職山本  
強深師の「大日寺略伝」は興味深く読ませていた。たゞ、  
まじりついでに大日寺第一世秀乘律師と長曾我部氏の  
関連について、いさゝか史実と私見をのべて見たいと思  
います。

〔鶴嶺藩史〕慶長十三年僧秀乘大日寺を創す。公(高徳)

以て祈願所と為す。秀乘は長曾我部氏の疏族にして  
譜岐の塩飽に住み、朝鮮の役公と相親善なり。後に  
幕府して佐伯に移り廬して女島(俗に地藏庵と号す)  
に居る。公佐伯に就封して偶々之を見つて曰く「予卿  
を見ざることを久し。因らざりき近く我封内に在ると  
は、彼を武士とならんか予之を重用せん」と。秀乘  
辞して曰く「野衲既に身を捨て仏に帰し、世事を顧  
みざるなり」と。公之を嘉し、因て此の命あり。

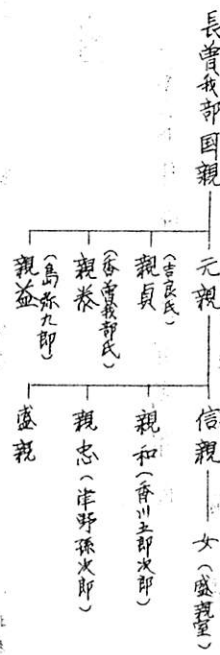
〔佐伯古老物語〕東光山大日寺、真言古義派大日寺の  
本山也、京都御室御所仁和寺と稱す。勝功德院室兼  
大日寺権僧正と号す。大日寺賞王院は慶長十三戊申  
年高政公御代の草創にて、開山は俗姓山内の末葉に  
て秀乘律師と云ひ、讃州塩飽より來りて建立せし由  
中伝ふ。開山秀乘より享保年中住僧秀盛まで九世に  
て百五十年を経る。(古老物語は享保十六年ころの著述  
筆者不明)

さて大日寺開山秀乘律師は鶴嶺藩史によれば長曾我部  
氏の疎族(支族)、古老物語によれば山内の末葉となつてお  
ります。この秀乘律師について先師佐藤鶴谷翁は長曾我  
部疎族の説をとり、秀乘は元親の庶子、おそらく秀親と  
名乗つていたのではないだろうか。佐伯事蹟考(末寛  
稿)に書いておられますが、古老物語の山内の末葉といふ  
伝承にはかなり迷つていたやうで、「土佐の山内は盛親が  
関ヶ原役に敗れた後、これに代つて封じられた山内一重  
を祖としてゐる。すると秀乘と土佐の山内は關係はない  
筈だが」と私に語つたことがあります。

古老物語の山内の末葉説は当時(享保年間)大日寺関係  
者に伝えられていた説のやうで、それは土佐高知二十万  
石の山内氏ではなく、同氏の遠祖でもある藤原秀郷の後  
佐藤公清の子首藤助清に於いては首藤山内氏のことと

秀乘の倭姓についてはそういつた伝承もあつたものと思  
われます。

鶴巻略史の記述によつて長曾我部氏の一族といふこと  
に於ると、山本師の太日寺略伝に記されてゐる『讃州  
長曾我部元親の三男にして、一應正史を調べてみる必要が  
ありそうです。次に長曾  
我部氏略系を記しておきます。



長曾我部氏は帰化人秦氏の一族で、蘇我氏の部氏であ  
る京我部をひきいた宗我部氏の後といわれ、土佐國長岡  
郡に拠つたのが長宗(曾)我部氏、同國香美郡に拠つたの  
が香曾我部氏であります。土佐國日根國家一條家の所領  
で、応仁の乱に京都を遁れた一條兼良が土佐に下り、そ  
の子教房の後が守護として土着したのが土佐一條氏であ  
ります。この一條氏に京都から従つて来た重臣に土着  
といふ東小路、西小路、入江、飛鳥井、白川の五氏があ  
り、また土着豪族から出た重臣に七大夫といふ長曾我部  
本山、吉良、大守、香曾我部、安岐、津野の七氏があり  
ます。長曾我部氏は一條派の大夫(家長、執政)の一人であ  
り、國親の父業序よしのりの時に其他の六氏と均衡した勢  
力でありました。國親は一條房基の権臣となり、他氏  
を圧したので憎まれて謀殺され、その子主家一條氏の庇  
護をうけて成長した元親は、父を亡滅させた六氏と争ひ、  
次々にこれを攻伐して土佐全國の実権を握り、暗愚君主

家一條兼定を追つて名実共に土佐の太守となり、勢をか  
つて所領讃岐、伊豫の三州に進出、四國全域を平定し  
て、紀伊、和泉三州を窺ひました。

元親の弟親貞は七大夫の一人吉良氏の名跡を継ぎ、そ  
の弟親恭は同じく香曾我部を、三男親忠は同じく津野氏  
と名乗りました。元親には四男二女がありましたが、長  
男信親は弥三郎と称し、天正十四年豊臣秀吉の九州征伐  
にあたり、父元親と共に先遣隊として豊後に入り、島津

軍と戸次川に戦つて討死しました。次男日同族香川氏を  
嗣ぎ、五郎次郎親和といひ、三男は津野孫次郎親忠、い  
づれも元親より先に死なされたので、四男盛親が後を  
継ぎました。盛親が家を継いだのは慶長二年頃で、文祿  
慶長二度の朝鮮役には元親が兵を率いて従軍しました。

盛親は関ヶ原役以西軍として参加したため領國を奪われ、  
京都に出て僧となり大岩祐亭と号しましたが、大坂の陣  
に大名浪人として大坂城に籠城、敗戦の後捕えられて京  
都六條河原で斬られました。

元親の三男は津野孫次郎親忠で秀親でも秀乘でもあり  
ません。だが元親ほどの大丈夫なら廢子の一人や二人あ  
つても不思議ではなからうといふので、鶴巻翁は秀親の  
存在を推定したのであります。が、史実といふことになら  
んとすといふ怪しいことになつてゐます。

讃岐塩飽郡といふのは塩飽列島を中心とした地域であ  
ります。この塩飽列島は塩飽水軍(海賊)といわれた海  
の土豪が拠つたところ、その頭首として知られてゐるも  
のには宮本、塩飽、益田氏などがあります。

次に長曾我部氏の疎族といふ言葉がありますが、長曾  
我部氏から分れた支族には江村、広井、中島、野田、大  
黒、上村、津野、久富、浅富、馬場、宍野、西和田、蒲  
原、益田、國原、伊波、比賀山、島崎の各氏が数多くあ

つてゐる。長曾我部氏は、土佐國の實権を握り、暗愚君主

以上の点から香葉律師が元親の子弟であることを証する史実は何もありませんが、彼が一時的であつても讃州塩飽を領していたことは考えられなないことではなないし、まして長曾我部氏の支族であれば、主君元親に従つて朝鮮以後に従軍したであらうし、そのさい塩飽水軍をひきいて、同じく瀬戸内水軍の將であつた毛利高政と親しくしたであらうことは充分に考えられることとあります。(おあり)

研究

潮谷寺古佛の由来

伝説は蛇神族の産んだ話か

赤松会員 山岩 田 善 市

潮谷寺本尊阿弥陀如来の古伝説によると、僧が四国土佐から佐伯に使船、蛇になつて上陸、山の中で脱皮して如來となり、被護の上にお立ちになられた。それを聖人が發見して終には潮谷寺の御本尊として祀られたと云うお話しであります。發見された所にあつた蛇の被護を集めて祀つたのが汐月の辰長良大権現、湖沼になつて辰長良神社となつています。そしてこの附近の村々、汐月、守山、江頭、相江、津志師成をまとめて辰長良といひます。大分大学の富永先生のお説によりますと、蛇神と呼ぶのトビ、トベ、ナガ、ナガラなど、呼び名があるとのことですから、辰長良大権現は辰長(ナガラ)の地即ち蛇神族の地に蛇神として祀られたことになります。更に佐伯氏の居館跡と思われる上の台、上ノ屋敷は辰長良大権現に続く台地であつて、佐伯氏は祖母殿大明神といふ大蛇神の子孫でありますから、土佐の國から蛇神が蛇神の子孫佐伯氏を頼つて蛇神族の地に來て蛇神として祀られた

たことになり、面白く伝説であります。又伝説中にある塩月村善右工門入住居の地は八頭(ヤカシラ)という所で、昔ここに一つの塚があつて、それをあひいて左から入つて頭が蛇が居たのでヤカシラと名付けたといふことです。伝説には直接関係はありませんが、佐伯惟治を祀つた神夜は富尾(トビウ)、鷗尾(トビウ)、鷗野尾(トビウ)等と云ひ蛇神の名が付けられています。辰長相江には富尾(トビウ)の姓があります。蛇が穴軒もあり、堅田にも或尾(トビウ)の姓があります。やはり蛇神族の關係でしょう。こうした事からこの伝説をみると、蛇神説は阿弥陀如来の渡來をからませた、佐伯の産んだ民俗説話ではありますまいか。

さて次に土佐から乗船した僧が蛇になりましたが、人が蛇になつたり蛇が人になつたりする話はい、昔話も縁起物語によくあります。ごん話も蛇そのものの話で日まぐ、神仏とか又は英雄とかを偉大な力の持主として恐れ崇め信仰の方便的な物語になつています。この伝説では阿弥陀如来の本尊によつて、誰でも極樂往生が出来ることと云う尊い仏の、聖妙不思議を現すことを強調した話となつています。昔の人はこの伝説を有難く信仰したものでしょう。然しこの伝説が産まれるような、何かとあるにちがいありません。そこでこの伝説を史実に還元して考えたい。昔にどうなりましようか、無論無理な話ではあります。他に解くような文献もなし、何かの手掛りを求めて想像によつて話を進める目かありませんが、あえてその危険をおかしてみようと思ひます。

先ず土佐から僧が船に乗り、その船は佐伯帰りの船であり、船着場は古市という港になつています。この話を時代の考察してみますと、古市が港として存在したのは、佐伯惟治が相竿礼城に据つて威勢を張つた当時の城下所であつた關係だと思ひます。そうすると凡そ千五百年代ではないかと想定されます。潮谷寺について沿革を調べてみますと、永祿年間大友